様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００５１６

研究課題名（和文）アフロキューバ主義における混血アイデンティティの言説形成プロセスの解明

研究課題名（英文）Elucidation of the Discourse Formation Process of Mixed Race Identity in Afrocubanism

研究代表者
安保　寛尚（Ambo, Hironao）

立命館大学・法学部・教授

研究者番号：５０７３３９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、アフロキューバ主義と呼ばれる1920年代から40年代にかけての黒人主義芸術の流行を通して、キューバでどのように黒人文化が受容されたのか、また白人と黒人の混血アイデンティティの言説がどのように形成されていったのかの解明を試みた。そして大きく３点の成果を上げることができた。第一に、詩人と音楽家の共同制作を通じて、黒人文化がハイカルチャーとローカルチャーの両方で受容された展開を明らかにした。第二に、キューバ詩史におけるアフロキューバ主義の黒人詩の位置づけ、およびその流行と衰退の背景や原因を解明した。そして第三に、民族学・民俗学研究における「キューバ性」の表現と思想を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アフロキューバ主義は、先行研究においては、白人エリートによって主導された風俗主義の一時的流行に終わったと総括されることが多い。しかしながらこの運動に加わった詩人、音楽家、民族・民俗学者のアプローチや思想、成果は多様である。本研究においては、クラシック音楽および民衆音楽においてアフリカ的要素が導入されたプロセス、黒人詩の展開と政治的革命の機運との関係、そして民俗学者によるキューバの文化変容の思想、民話の創作の分析を行い、その諸相を明らかにした。その成果は、今日のキューバにおける文化的混血のアイデンティティを理解する一助となるだけでなく、今後この運動について分野横断的な研究を可能にする意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research, I examined how black culture was accepted in Cuba through the black art movement called Afrocubanism from the 1920s to the 1940s, and how the discourse of white-black mixed-race identity was disseminated. I tried to elucidate how it was formed. We were able to achieve three major results. First, through the collaboration of poets and musicians, I clarified how black culture was accepted in both high culture and local culture. Second, I clarified the position of Afrocuban black poetry in the history of Cuban poetry, and the background and causes of its prevalence and decline. Thirdly, I clarified the expression and thought of "Cubanness" in ethnology and folklore studies.

研究分野：文学、文化人類学

キーワード：アフロキューバ主義　黒人詩　黒人芸術　キューバ文学　アレホ・カルペンティエル　フェルナンド・オルティス　リディア・カブレラ　混血のレトリック

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

キューバでは、1920 年代から 40 年代にかけて、アフロキューバ主義と呼ばれる黒人芸術運動が起こった。先行研究においては、この運動は当時の西欧と米国における黒人文化流行の影響を受けて、白人エリートが戦略的に黒人文化を利用した一時的流行だったとおよそ総括されている。

しかし報告者は、自身のそれまでの研究において、この運動を牽引した白人エリートたちの思想やアプローチの仕方が異なること、またこの運動に加わったのは白人エリートだけではなく、実際には支配的言説と抵抗言説の駆け引きがあることを明らかにしてきた。

そこで本研究では、そのような研究成果を発展させ、黒人芸術の隆盛の中、異なる思想や戦略の間でどのような交渉が行われ、キューバの混血アイデンティティの言説が生み出されていったのかを解明しようと考えた。

２．研究の目的

1 で述べた背景と問題意識を踏まえて、本研究は、アフロキューバ主義がどのようにキューバにおいて黒人文化の受容を促したのか、また文学作品（特に詩）や音楽、民俗学・民俗学研究がどのように混血アイデンティティの言説を形成したのかを明らかにすることを目的とした。

その目的のために 3 つの研究課題を設けた。すなわち、（１）キューバの黒人文化をめぐる詩人と音楽家のコラボレーションがどのように行われ、どのような作品を産んだのか、（２）キューバにおける詩の歴史においてアフロキューバ主義における黒人詩がどのように位置づけられ、どのように展開したのか、そして（３）民族学・民俗学研究がアフリカ起源の伝統の探求を通して、どのようにキューバのアイデンティティを構築しようとしたのか、また「キューバ的なもの」の表現を試みたのかの 3 つである。以上の課題の解明を通して目的の達成を試みた。

３．研究の方法

本研究は文献研究である。２で述べた研究目的を達成するため、研究期間を通して必要な文献資料の収集を行った。国内で可能な資料収集を行っただけでなく、キューバに出張し、研究協力者から資料を受け取り、必要な助言を受けた。また書店、古書店をめぐって必要な資料収集にあたった。しかし新型コロナウィルスの影響で、研究計画通りの海外出張ができなくなり、研究期間の延長、および方向修正を行った。そして 2022 年には、新たな方向づけの上、キューバ関連の資料が充実するマイアミ大学附属キューバ遺産コレクション（アメリカ合衆国）での調査を実施した。

研究期間を通して、それらの資料の分析、考察、整理を行い、所属する日本イスパニヤ学会、立命館大学国際言語文化研究所、および同研究所プロジェクトの一つヴァナキュラー研究会において口頭発表を行った。また、それらの口頭発表をもとに論文を執筆して研究成果を公表した。

４．研究成果

2 で述べた 3 つの研究課題ごとにその成果をまとめる。

（１）＜キューバの黒人文化をめぐる詩人と音楽家のコラボレーション＞

アフロキューバ主義の流行のきっかけになったのは、西欧と米国における黒人芸術流行の影響である。それらはキューバの文芸誌を通して伝えられたが、ジャーナリストとして重要な役割を果たしたのが、今日小説家として知られるアレホ・カルペンティエルである。政治的革命の機運と結びついた前衛芸術運動に参加していたカルペンティエルは、パリに亡命してそこでの黒人文化流行を伝えたのだ。その中でカルペンティエルは、キューバ人のクラシック音楽作曲家と共に黒人文化の要素を取り入れた詩と音楽の共同制作に取り組む。キューバではアマデオ・ロルダンとのコラボレーションで、バレエ作品『レバンバランバ』と『アナキジェーの奇跡』を制作した。パリではアレハンドロ・ガルシア・カトゥルラと交流し、アフロキューバ詩の先駆的作品とされるカルペンティエルの「祈祷」と「歌」に、「二篇のアフロ・キューバの詩」と題した交響曲が作曲された。

このようなコラボレーションの結果、実際にアフロ系宗教儀式に参加したカルペンティエルの経験をもとに書かれた詩と、太鼓などのアフリカ由来の楽器やリズムを導入した音楽が組み合わされて、キューバとパリのクラシック音楽界に新風を巻き起こした。報告者は中央大学出版部『モダニズムを俯瞰する』（2018）所収の「ミノリスタとアフロキューバ主義」においてそのプロセスを論じた。そして、当時キューバにおいて軽蔑対象であったアフリカ起源の文化が、いかにハイカルチャーに浸透していったのかを明らかにした。報告者は「ニコラス・ギジェンの『村のモチーフ』の誕生について（『ラテンアメリカ研究年報』No.31, 2011）において、およそ同時期に、キューバで白人音楽の旋律とアフリカ音楽のコール＆レスポンスが組み合わさったソン

がダンス音楽として民衆の間で流行となったことを論じている。本研究においては、まだ論文として形にはなっていないが、これら二つの成果を土台に、黒人文化がハイカルチャーとローカルチャーの両面からキューバで受容されていったことのさらなる分析に取り組んだ。

（２）＜キューバ詩史におけるアフロキューバ主義の黒人詩の位置づけと展開＞

アフロキューバ主義における黒人詩は、必ずしも黒人によって書かれた詩を意味しない。実際には、多くの場合、黒人の表象や黒人文化を題材に白人によって書かれた詩を指す。そこでまず、キューバ詩の歴史的展開において、このような黒人詩がどのように位置づけられるのかを明らかにする必要があった。植民地時代に遡ってキューバ詩の展開を辿ると、そもそも黒人とその文化が詩に描出されることが稀であることが明らかとなった。元奴隷詩人のフランシスコ・マンサノや、自由黒人のプラシドといった詩人の活躍は知られているが、検閲の影響もあって、およそその詩作品は西欧文学の枠組みの中で書かれていたのだ。報告者はこの研究の成果を「植民地時代キューバの物語詩–キューバ人の人種的・文化的主体の表象の変遷について–」(『立命館言語文化研究』33 巻 3 号，2022）にまとめ、「日本バラッド協会第 13 回会合において口頭発表（2022）も行った。その中で、植民地時代においてキューバ文学の萌芽が見られる 19 世紀前半には、詩の題材やキューバ人の表象としてスペイン系白人農民が選ばれたこと、そして独立主義が高揚した 19 世紀後半においては、かつて宗主国スペインの支配と迫害に抵抗するインディオが選ばれたことを論じた。つまり、アフロキューバ主義の黒人詩における黒人の表象がそれまでにはない試みであったことを明らかにした。報告者は、「カクテルとアヒアコ–キューバ国民統合の隠喩とレトリックをめぐって–」（『立命館経営学』55 巻 5 号，2017）において、アフロキューバ主義におけるムラート（黒人と白人の混血）詩人ニコラス・ギジェンが、物語詩「二人の祖父のバラッド」で、植民者の白人と奴隷の黒人が対立関係から和解へと至り、二人を祖父とするキューバ人、すなわち混血したキューバ人に人種的・文化的主体を見たことを分析した。本研究はこの論考に接続し、キューバの混血アイデンティティの形成の過程をより広い視点から明らかにした。

その一方で、アフロキューバ主義における黒人詩の展開についても研究成果を上げることができた。報告者は 2020 年度に「ラモン・ギラオとエミリオ・バジャガスの黒人詩とアンソロジーについて」と題した口頭発表を日本イスパニヤ学会で行った。そして翌年にはこれを土台に、論文「アフロキューバ主義における黒人詩の流行について–エミリオ・バジャガスとラモン・ギラオの黒人詩アンソロジーをめぐる一考察」を発表した(『立命館大学言語文化研究』33 巻 1 号)。この論考においては、アフロキューバ主義における黒人詩の始まりからその流行、そして流行の終焉までを視野に入れて、1935 年にバジャガスが編纂した『イスパノアメリカ黒人詩のアンソロジー』と、1938 年にギラオが編纂した『アフロキューバ詩の軌跡　1928-37』の比較分析を行った。これら 2 冊は、アフロキューバ主義が展開している最中に刊行された黒人詩のアンソロジーである。そこで明らかにしたのは、黒人詩が当時のキューバにおける政治的革命と連動する反抗精神の表れであったということである。つまり、保守的で時代遅れなものに反発する前衛的姿勢が、まだ差別と偏見の対象だった黒人文化を創作に用いる新しさと結びついていたということだ。その結果、1934 年における革命の失敗と共に黒人氏の流行も下火になり、詩人たちはより普遍的な詩の創作へと方向転換したことを明らかにした。また、ギラオのアンソロジーには、民俗学者フェルナンド・オルティスの影響を受けて、植民地時代の黒人詩からアフロキューバ主義への展開に「白人化」と「進化」を見る差別的態度があることを解明した。

この他、キューバの黒人詩に関わっては、「エシュからシグニファイング・モンキーへ–アフリカ、キューバ、アメリカを結ぶ神話とトリックスターをめぐって」（『立命館大学言語文化研究』31 巻 1 号，2019）を発表し、アフリカ起源のトリックスターであるエシュの伝統と、キューバの先住民の神話やカトリックの伝統との混淆を物語るアフロキューバ主義の黒人詩を分析したことも、この芸術運動の一つの側面を示すことができた成果である。また、詩ではないが、黒人の登場人物を描き、黒人文化を舞台に導入したことで、アフロキューバ主義の先駆点されるブッフォ劇についての研究成果も発表した。それが「キューバのブッフォ劇におけるヴァナキュラー言語、およびナショナリズムの発現」『立命館言語文化研究』第 33 巻 3 号, 2022）で、19 世紀キューバにおいて、ナショナリズムの高揚と共に人気を得たブッフォ劇の展開を分析し、スペインとは異なるキューバ的なものを表現するために、黒人登場人物と黒人文化が白人クリオーリョ作家によって都合よく利用されたことを論じた。

（３）＜民族学・民俗学研究におけるアフリカ起源の伝統の探求とキューバのアイデンティティを構築、および「キューバ的なもの」の表現＞

アフロキューバ主義は黒人芸術運動であるが、民族学・民俗学もその展開に重要な役割を果たした。というのも、アフリカ系宗教や文化の研究成果が詩人や画家に参照され、民俗学者は民話収集やその再創造を行ったからだ。報告者は以前に「フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖の キューバ的対位法』をめぐる一考察（１）–キューバ性とトランスカルチュレイションにつ

いて–」（『立命館言語文化研究』28 巻 2 号, 2016）を発表し、アフロキューバ主義の芸術家たちと交流のあった民族・民俗学者オルティスが論じたキューバの文化的混血思想について分析を行った。本研究ではその分析をさらに深め、立命館大学国際言語文化研究所主催の連続講座「食と甘さの世界変容」において、「砂糖の秩序、タバコのカオス」と題する口頭発表（2019）を行い、翌年「砂糖の秩序、タバコのカオス–フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖のキューバ的対位法』におけるキューバ性とカリブ性をめぐって」（『立命館言語文化研究』32 巻 1 号）と題する論文を発表した。オルティスの著作は、キューバにおける砂糖生産と奴隷貿易の歴史、その変遷を踏まえて、植民地主義的な砂糖とキューバ独自の産物としてのタバコの対比を「キューバ的対位法」というキューバ農村の伝統的即興詩のやり取りに喩えて対比させている。本研究では、オルティスが生み出した「トランスカルチュレイション」というキューバの混血のレトリックが、キューバに土着的なものが多文化との接触によって生じる変容を意味していること、そのような文化変容にオルティスは「キューバ性」のありようを見ていたことを明らかにした。またそのような思想には、権威的言説に抵抗する複雑性、ゆらぎ、予測不可能性といった近年のカリブ海域の作家が提起する思想との連続性があることを指摘した。

当初の研究計画では、オルティスについてさらに研究を進める予定だったが、新型コロナウィルスの影響で、そのために必要なキューバへの渡航と資料収集が困難な状況になった。そこで計画を変更し、キューバにおける黒人民俗学研究を通して黒人民話の収集とそれを題材に捜索を行ったリディア・カブレラの研究に着手した。2022 年に、カブレラの貴重な資料が揃う米国のマイアミ大学附属キューバ遺産コレクションで調査を行い、ヴァナキュラー研究会における「ヴァナキュラーな素材の文学的加工について：キューバの黒人ヴァナキュラー文化を事例に」（2022）、および立命館大学国際言語文化研究所主催の連続講座における「キューバの密林：リディア・カブレラと神話／民話、驚異的現実の交差点」（2022）と題した口頭発表でその成果を公表した。研究期間内の刊行とはならなかったが、これらの発表を土台に『立命館言語文化研究』に、論文「リディア・カブレラの『キューバの黒人のおはなし』とキューバのヴァナキュラー文学」を執筆した。この研究によって、アフロキューバ主義の詩人による風俗主義的な黒人表象や、オルティスが志向した文化変容とは異なる、カブレラ独自のキューバの黒人文化の記述のあり方を示すことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 安保寛尚	４．巻 33
２．論文標題 アフロキューバ主義における黒人詩の流行について－エミリオ・バジャガスとラモン・ギラオの黒人詩アンソロジーをめぐる一考察－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 279-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安保寛尚	４．巻 -
２．論文標題 リディア・カブレラの『キューバの黒人のおはなし』とキューバのヴァナキュラー文学	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安保寛尚	４．巻 33巻3号
２．論文標題 キューバのブッフォ劇におけるヴァナキュラー言語、およびナショナリズムの発現	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安保寛尚	４．巻 33巻3号
２．論文標題 植民地時代キューバの物語詩ーキューバ人の人種的・文化的主体の表象の変遷についてー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 227-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安保寛尚	4．巻 32巻1号
2．論文標題 砂糖の秩序、タバコのカオス-フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖のキューバ的対位法』におけるキューバ性とカリブ性をめぐって-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00013561	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安保寛尚	4．巻 31巻1号
2．論文標題 エシュからシグニファイング・モンキーへ－アフリカ、キューバ、アメリカを結ぶ神話について－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 安保寛尚
2．発表標題 キューバの密林：リディア・カブレラと神話／民話、驚異的現実の交差点
3．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所　連続講座「人間と人間でないものの相互作用」
4．発表年 2022年

1．発表者名 安保寛尚
2．発表標題 キューバのブッフォ劇におけるヴァナキュラー言語、およびナショナリズムの発現
3．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所　リレー講座
4．発表年 2021年

１．発表者名 安保寛尚
２．発表標題 ヴァナキュラーな素材の文学的加工について：キューバのヴァナキュラー文化を事例に
３．学会等名 ヴァナキュラー文化研究会（立命館大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 安保寛尚
２．発表標題 キューバの密林：リディア・カブレラと神話／民話、驚異的現実の交差点
３．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所連続講座
４．発表年 2022年

１．発表者名 安保寛尚
２．発表標題 植民地時代キューバの物語詩ー「キューバ人」の人種的・文化的主体の表象の変遷についてー
３．学会等名 日本バラッド協会第13回会合
４．発表年 2022年

１．発表者名 安保寛尚
２．発表標題 ラモン・ギラオとエミリオ・バジャガスの黒人詩とアンソロジーについて
３．学会等名 日本イスパニヤ学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 安保寛尚
２．発表標題 砂糖の秩序、タバコのカオス
３．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所　連続講座「食と甘さの世界変容」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関